千田明の歴史散歩道
大阪の枚方を訪ねて

鍵屋
鍵屋浦には「淀はいらぬ、三味や太鼓で船止める」と唄われた鍵屋（現在は私立枚方宿鍵屋資料館）、鍵屋は江戸時代宿屋を営み、三十石船の船待ち宿として繁盛していたそうで、京の伏見と大坂の八軒家を結ぶ三十石船に小舟（通称くらわんか舟）を出して「ごんぼ汁くらわんか、餅くらわんか、酒くらわんか」と河内弁で柄悪く飲食物を売っていたようです。近年まで料理屋旅館で、2階に上がると堤防越えに淀川・高槻の遠望を望むことができます。

2025年は猛暑なので、編集者より近隣の歴史を書かれてはということで過去の写真を整理して紹介することとしました。

枚方（ひらかた）といえば、昭和の関西人に聞けば必ず菊人形の「枚方パーク」といわれ現在、唯一大阪で残っている遊園地があります。ひらぱー兄さん岡田准一のコマーシャルで今も頑張っておられますが、昔はNHKの大河ドラマの菊人形を見るため、近隣から大勢の人が押し寄せていましたが、今は往時の面影はありません。

この地は、京阪電車枚方公園駅から枚方市駅にかけて東海道五十七の枚方宿のあった所で、大名の本陣・脇本陣がある宿場町であり、京の伏見から大阪八軒家間の船旅の途中、伏見船・過書船を取り締まる番所があった地でもあります。

枚方・交野は、天野川に代表するように七夕伝説の残る地で、旧国道1号線に掛かるカササギ橋は七夕伝説の織姫と彦星の橋渡しをした鵲にちなんでものです。また、大阪の百済付近に亡命していた百済王（くだらのこにしき）の子孫敬福が陸奥守のおり、東大寺の廬舎那仏建立用のメッキの金が不足していたため、金の鉱脈を発掘して金を献上して大仏の開眼ができることができた功績により、枚方の百済寺跡付近に移住した地であります。付近には、天皇家の御猟場である禁野や牧場である牧野という地名が残っております。

京阪電車御殿山駅付近には、藤原氏により、惟仁親王（清和天皇）に皇太子の権利を奪われた文徳天皇の第一皇子惟喬親王の別荘「渚院」跡があり、在原業平が渚院で親王を慰めるため、「世の中にたえて桜のなかりせば春のこころはのどけからまし」と詠んだ地でもあります。現在は、廃観音寺の鐘楼と碑が残っております。

問屋役人木南家
過書船とは、通行許可を受けている船のことです。船番所は船の取り締まりが役目のお役所で伏見、淀、橋本、枚方、大坂に置かれていました。伏見船は大坂側の過書船に対し、後に許可が出た京都伏見側の船のことです。三十石船は大坂八軒屋浜と伏見浜を朝と夕方の二回定期運行しており、船頭4人、乗客定員28人の旅客船でした。のぼりは人力にて一日、下りは半日で下ったようです。

本陣跡
本陣を守るため街道には鍵曲がりや西見付け（見張り所）・東見付け等の防衛の工夫がされており、参勤交代の大名や紀州御三家の徳川吉宗公も宿泊されたと思われる、本陣跡の三ツ矢公園。

千田明 さん
2011年5月に電気工事業、電気通信工事業を業務とする『株式会社GNR』を設立。現在は退任。

茶屋御殿遠望
昔は高槻城も見えたそうです。

茶屋御殿
万年寺山にあった豊臣秀吉の乙御前をすまわせたという「お茶屋御殿」跡があり、高槻方面の遠望が素晴らしく、秀吉も淀川堤防（東海道）の整備工事の進捗状況を見分していたと思われます。また、古墳の跡地で石棺か露出しています。

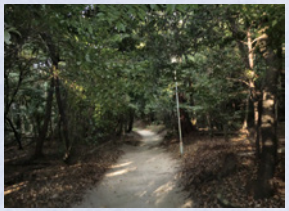
正面／東見附跡
右手前／小野平右衛門家、枚方宿問屋役人 八幡屋
正面は東見附、天野川には軍事目的のため、橋は架かっておらず、紀州公が参勤交代のおり橋をかけたそうです。手前右の建物は江戸中期より村年寄と問屋役人を兼ね、醤油屋の八幡屋を営んでいた小野家があります。本陣の主人が裃姿で行列をここでお送りしたようです。忘れてはならないのは本家改修の時、明治18年6月淀川洪水のおり天井を超えて冠水し、天井裏に当時の魚のミイラが出てきたそうです。自然災害の備えの必要性を考えされます。

宗左の辻
京街道と磐船街道の合流点ですが、本陣防御のため枚方橋と同様、鍵形に曲がります。枚方宿の遊女たちが「送りましょうか、送られましょうか、せめて宗左の辻までも」といわれた精油業の角野宗左の屋敷跡である東海道と奈良方面の磐船街道の合流点である宗左の辻の碑（右「大坂みち」は明治まで坂では士族が反乱するとか商人が商売が下り坂になるを嫌って「大阪」と変更したようでこの道標は大坂となっている）。

枚方宿東見附跡
（旧鵲橋西詰跡）
東見附は天野川に接する枚方宿の東端で、道の両側に柵で囲われた松が植えられていました。『河内名所図会』（亨和元年-1801）には、淀・伏見方向に向かう大名行列が天野川の橋に差しかかり、見送りに出た宿役人が東見附で待ち受ける光景が描かれています。元文2年（1737）の『岡新町村明細帳』によると、天野川には長さ17間、幅3間1尺の板橋が架かっていて、岡・岡新町両村が共同管理していましたが、修繕・架替の費用は幕府が負担していました。紀伊徳川家は、参勤交代の際枚方宿に宿泊しましたが、天野川渡河にあたっては、既設橋の上流に専用の仮橋を架けさせました。

小野平右衛門家
八幡屋
東海道枚方宿岡新町村の小野家は、江戸中期より、村年寄と問屋役人を兼ね、村と宿駅の運営に影響力を行使した。当家には、正徳六年（1716）建築の古図と鬼瓦を存するが、現在の建物は幕末期と推定される。本建物は、街道に面した広い間口で、表門口には揚見世と下げ戸が現存し、曽て醤油業を兼ねていた町家の遺構を残している。

日置天神
牧野の地名は天皇家の樟葉の牧であり、狩猟地であったため、禁野の地名も残っており、渚の院に逗留していた惟喬親王が狩をしていた時、なかなか鷹が帰ってこないので「しばし日を置かせたまえ」と祈ったところから命名された神社です。中々栄えていた地域でありましたが南北朝時代に度々戦禍にあい廃墟となっていたが浄土真宗蓮如の六男連淳が敬応寺の鎮守社として再建された。古木も茂っていましたが倒壊の危険と物騒なので全て切り倒されています。方墳の遺蹟の地でもあります。



交野天神社の森
大和政権の実質的な天皇とみなされる第10代崇神天皇の御代に叔父のタケハヤニヤスノミコが反乱、現在の木津川で同じく叔父であるオオビコノミコトと戦いタケハヤニヤスノミコが矢で射られ敗退し、配下が樟葉に逃げ込んだ時、余りの恐怖で糞を袴に垂れ流した所から「糞袴」の不名誉な地名（勝者が敗者に屈辱を）でしたが、現在は綺麗な樟葉または楠葉の地名となり高層マンションもある閑静な住宅地であります。人の手が入っていない自然の森です。ほの暗い中、小鳥がさえずりー人では少し怖いような神を感ずる古代の自然環境にあります（余談ですが自衛隊の弾薬保管地である奈良の祝園では大半が処刑されました）。

敬応寺
浄土真宗蓮如の六男連淳を迎え招提寺内町として栄えていましたが、織田信長に恭順し戦禍は免れましたが明智光秀謀反のおりは味方したため、秀吉により寺内町の機能は停止されました。時代は下り大塩平八郎の乱のおり、村から参加しようとした者が鎮圧後、多く罰せられたました（浄土真宗寺院は防御の役目のため監視の櫓があります。右手）。

継体天皇が即位の地
ここは506年に現在の天皇家の始祖である継体天皇が即位した「樟葉の宮跡」の伝承の地でもあります。応神・仁徳の河内王朝の武烈天皇の時、後継者を次々と殺害したため、皇位継承者が居らず皇位継承権があるのは天皇五世の孫までなのでギリギリ応神天皇の五代の孫、出身は近江の三尾（父方）・越、現在の福井県丸岡（母方）で成長した男大迹（おほど）が大伴金村に迎えられ、最終的に手白香（タシラカノイツラメ）（武烈天皇の姉、欽明天皇の母）の婿入りのような形で20年程かけて奈良に入いることができました（因みに墳墓は高槻市の今城塚古墳として整備されて、都は樟葉宮・長岡宮・筒城宮・飛鳥宮と転々としました）。

交野天神社（かたの）
桓武天皇の父、光仁天皇（天武天皇系最後の称徳天皇崩御の後に天智系の天皇に復活した。聖武天皇の血を引く井上内親王を妻にしていたため、62歳にして天皇となった。井上内親王が呪詛したとして他戸親王を廃太子し、桓武天皇に譲位）を祀ったのが始まりとされ、本殿は重要文化財であります。桓武天皇の母は百済王の血を引く高野新笠で枚方の地は出身地であったと思われます。また百済氏系の田之口姫は嵯峨天皇の檀林皇后の母であり、枚方は天皇家に関連の深い地でありました。

かささぎ橋
七夕伝説に基づく天野川にかかる橋。枚方には他にも織姫・彦星の石や織物神社等七夕に因む遺蹟があります。

百済時跡
663年、天智天皇が白村江で百済支援をして大敗したため百済より避難して来た人々と人質であった百済王が持統天皇より百済王（くだらのこにしき）の性を賜り、聖武天皇の時代に百済王敬福が陸奥守在任中に黄金を献上し、奈良大仏のメッキに使用されました。また、橘奈良麻呂・藤原仲麻呂（恵美押勝）の乱で功績をあげ、大阪市東住吉区桑津付近で住まいしていましたが、一族の本拠地を枚方に写し、百済王神社・百済寺を建立し、付近に住んでいた土地柄であります。

百済王神社
百済王氏の祖霊と牛頭天王を祀る。本殿は、江戸時代末期に春日大社本殿を移築された「春日移し」です。隣接して百済寺の遺蹟があります。

渚の院跡の碑
現在は旧跡はありませんが、文徳天皇の第一皇子であった惟喬親王が藤原氏血族の弟、惟仁親王、のちの清和天皇に皇位を継承に敗れたおり、在原業平が渚の院で「世の中に絶えて桜の咲かざれば春の心はのどけからまし」と慰められた所です。現在は、廃観音寺の鐘楼（戦中、金属徴収のおり天皇家ゆかりの地の鐘として徴収を免れた）と碑が残っております。（付近の地は御殿山といわれ、渚の院からとも、永井氏の陣屋があったからともいわれています。

片埜神社（重文）
垂仁天皇の命により、出雲より呼び出され、当麻蹴速と相撲をとり勝った野見宿禰（当時の風習である殉死を改め、埴輪の制を提案し子孫は土師氏として代々天皇の葬儀を司り、一部の子孫は菅原氏・大江氏を名乗った）が勧請したといわれる片埜神社（かたの・素佐之男大神・菅原道真公を祀る）、豊臣秀頼が片桐勝元に命じ大阪城の鬼門神社として修復され、一時は国宝でしたが、花火による失火により現在は重文となっております。北側の公園は枚方八景のひとつ牧野の桜の名所であり、アテルイ（蝦夷地の酋長で坂上田村麻呂に制圧された）の墓ともいわれている土盛があります。

朝原神社
片埜神社末社、天孫降臨の際、瓊瓊杵尊の道案内をしたという猿田彦大神を祀っている。

瘡神社
片埜神社末社、菅原道真公が九州の太宰府へ左遷されたおり、乗馬していた馬が倒れ、ここに葬られ藁草が供えられたことから草神、転じて瘡神（皮膚病の神）となった瘡神社。

牧野には、垂仁天皇の命により、出雲より呼び出され、当麻蹴速と相撲をとり、勝利した野見宿禰が勧請したといわれる素佐之男大神を祀る片埜神社があります。この地は、豊臣秀頼が片桐勝元に命じ、大阪城の鬼門神社として修復され、一時は国宝でしたが、花火で失火して現在は重文となっている本殿があります。

末社には、太宰府左遷のおり菅原道真公の乗馬が倒れ、ここに葬られ、藁草が供えられたことから草神社、転じて瘡神社と導きの神、猿田彦大神を祀っている朝原神社があります。

北側の公園は、枚方市民が選んだ枚方八景の一つ牧野の桜の広場があります。ここは、坂上田村麻呂が助命嘆願した蝦夷の酋長阿弓流為の処刑の地とも伝えられています。

樟葉または楠葉（くずは）の地名の由来は、崇神天皇のおり、反乱し敗戦した兵士か追いかけられ、恐怖のあまり褌（ふんどし）から屎を垂れ流して、逃げたところから「屎褌」（くそばかま）という地名がついたそうですが、後世、淀川沿いに葛の葉が茂っていたので転じて樟葉（楠）とした地であり、現在の天皇家の始祖である応神天皇五代目の継体天皇が即位した樟葉の宮跡地である交野神社（かたの）があります。

交野神社は、桓武天皇が父、弘仁天皇を祀ったのが始まりとされ、本殿は重文であります。右手奥の小高い丘には、貴船神社が鎮座します。やはりこの付近も水に悩まされた人々の祈願により勧請されたと思いますが、ここは506年に継体天皇が即位した「樟葉の宮跡」の伝承の地でもあります。

簡単に紹介しましたが、紙面がゆるさないので、またの機会に紹介できればと思いながら筆を置きたいと思います。